

報學學大西哥

號二十五百第

月九年二十和昭



行發局報學學大西關

目次

琉球久士記……………河村信一 (一)

フライツクス物語…村田敷之亮 (七)

紀南とところどころ…田邊信太郎 (七)

ボルネオ便り……………元島 巖 (八)

學内報…………… (三)

第二學期始業—夏期語學講習會—專門部
國漢科國語中等教員無試験檢定資格認定
—研究生制度設定—國防獻章—南苑爾氏
洋書寄贈—召集軍務公用者

校友會常議員會—大連支部—愛媛支部—
九年法會—九政會—動靜移動

關大スポーツ…………… (七)

庭球—陸上競技—野球—射擊—卓球—水
上競技—漕艇—柔道—劍道

學 生…………… (六)

經友會—東亞研究會—基督教青年會—辯
論部

學報俳壇…………… (九)

琉球久士記 (二)

教授 河村信一

引

排日抗日侮日と、あらゆる語で日本に反抗する支那のポスターの一つに「清光緒五年日割據琉球」と書いてある。支那事變分捕品陳列場で此のポスターを見た群衆は、無言の内に「そんな事があるものか、琉球は爲朝以來リッパに日本のものであつたのでは無いか、夫を今更日本が支那から奪つた様に考へ、宣傳する支那の鄙劣根性には、憤慨を乗り越えて、あきれざるを得ない」と云ひたさうな顔をしてゐる。又「地圖を見たつて、あるか無いかの小さな島國で、土地は瘠せ産物も少く、天恵が少く暴風の多い、こんな處をそんなに大切に思ふだけの價値があるのだらうか」など、げげんな感じをする様な風だ。然し試に東海のとより我が大日本帝國の全版圖を熟視すると、飛石の様にいくつもいくつも、連つてゐる之れ等の島々は、軍事上ゆゑかせに出来ないものだとかかる。支那が古い讒言を並べるのは唯唯がらせであらうが、我々は眞面目に眞實にがぢまるの島、うるまの島が絶好の〇〇根據地があり、海上貯〇場であり、其他種々の點から日本として是が非でも確實に把握して居らなければならぬ處だと思はざるを得ない。茲は聯盟も物が言へ無いグラント將軍

裏書の眞實の日本國土である、支那の發言には耳を傾けるのも大人氣無い。

東亞の風雲日に急に、北支には銃聲山河に響き、南江には妖雲樓臺を包み、一觸即發山雨將に來らんとする時、七月某日有志を誘つて南海孤島沖繩に向つて神戸を出帆した。前驅的颶風の影響も輕微であつたのでゆつくりと滞在し尙屬島へも廻つて自然人文の各角度から、古代及現在の琉球を見ようと腹案を作つたが、突發の二大事件の爲めに、急遽歸阪せざるを得なくなつた。一は動員命令發動の爲めで、其の日那覇市役所前には高張提燈をかゝげて終夜の事務に忙しく、街頭店前には號外の掲示と千人針の祈願で、群集又群集、俾も通行を妨げられた。此の超非常時光景を見ては、いつまで汗喘の旅を續ける氣には成れない。出征は出来ずとも銃後の國民として大に爲し盡すべき事は多い、即ち歸るときめる。今一つは漕艇部々員遭難の爲めで同部に關係ある以上、其通知に接し、晏然たるわけには行かない、始め電文甚簡にして事情がよくわからないう、徒に揣摩臆測して心配するだけであつたが、後に航空便で新聞の切抜が到着したので大體の事情がわかつた、そして主將が行衛不明になつたと云ふので、これは一大事だ、急いで歸らにやならぬとなつた。かくて

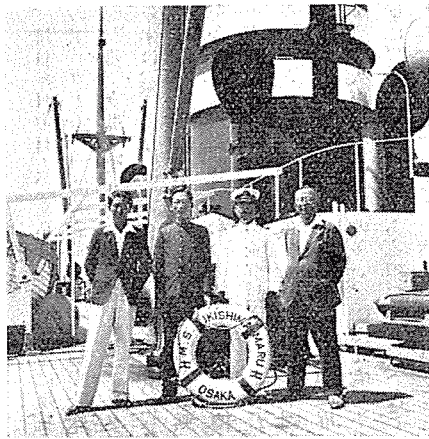
行李々々、最も早い出帆の船に依つて歸阪の途についたのである。

かう云ふわけで琉球の方の仕事は計畫の一部分だけで止めざるを得なかつた。晝夜兼行一日を三十時間位に費つたが夫れでも、あとから思ふと見残しや調べ不足があつた、之れ等は再遊の日に之を補ふ外には方法が無い。以上の斷り書を篇頭に置いて、これから琉球談に取りかゝる事とする。

一、船 路

日向灘で夜があけた。皇祖發祥の地は今し朝の輝きを受けて、靜かに醒めた高千穂霧島の峯々谷々に、とはの榮光を漲らして居る。曾遊の地宮崎、青島鶴戸のあたりを指呼の間に索め、三千年ゆるぎなき國運の彌榮を壽いだ。さすがは太平洋の一部で、うねりの波は高いが、食堂の顔觸れは變らない。船は進んで有明灘の前面に出て遠く佐多岬を望みながら針路を南に轉じた。晝すぎには最早九州の山々は薄靄に包まれてしまつた。俊寛僧都の流されたと云ふ島は何處だ、明治時代大噴火をした島々は何方だ、などゝ海圖をひろげ磁石を持ち出して甲板上の大評定を始めたが、肝腎の島影はさつぱり見えな、満目唯空と海、大船には乗つて何がとなく物さみしくなる、「船頭殿こそ勇健なれ」と氣を取り直して海面を見ると、珍らしや飛魚が活劇を見せてくれる。其内に大島小島、一つ又二つと見え出して自ら旅情を慰めてくれる。夜半奄美大島に着き、荷役に二時間程かゝつて再出帆。さア次は那覇だ、今宵一夜で船と御別れだと、嬉しそな會話を交した。

こんな風にして今では樂な航海で所謂一路平安琉球を指して行けるが昔は想像に餘る難航海で薩摩へ往復したものである。途中には七島灘の難所もある、行くも歸るも涙で別れたのである。其の航海の間の風物を歌つたものに琉球組踊「上り口説」と「下り口説」がある。又之に和する踊もよく酒間に演ぜられる。單調の節、素朴な型の内に旅愁を思はせ哀想を織つて居る。其の歌詞は琉球語であるが、他の歌に比して割合



長務事丸島淳、村河りよ右にて板甲丸島淳
(濟閣檢隊分兵艦總沖) 君諸の村北。林

にわかりよいから次に録して置く。

上り口説 (屋嘉比朝奇作)

(舊藩時代藩の使命を帯び鹿兒島へ旅立する道行を歌つたもので地名には現存のものも今日既に亡きものもある)

旅の出立觀音堂、千手觀音伏拜で、黄金酌取て立別る。袖に降る露押し拂ひ、大道松原歩み行く、行けば八幡崇元寺。美樂地高橋打渡で、袖を列ねて諸人

の、行くも歸るも中の橋、沖の側まで親子兄弟、列れて別る旅衣、袖と袖とに散る涙、船の響、疾く解と、船子勇みて眞帆ひけば、風は眞艦に午未、又も廻り逢ふ御縁とて、招く扇子や三重城、殘波岬も跡に見て、伊平屋波立浪押そへて、道の島々見渡せば七島渡中も灘やすく。立ちゆる烟や硫黄が島、佐田の岬に走並で、エイ、あれに見ゆるは御海門、富士に見紛がふ櫻島。

下り口説

(鹿兒島から歸國の道行である)

倍も旅寝の假枕、夢の覺みたる心地して、昨日今日とは思へども、最早九十月なりぬれば。やがて御暇下さりて、使者の面々皆揃て、辨財天堂伏拜で。いざや御假屋立出て滞在の人々、引列りて行屋の濱にて立別る。名殘惜氣の船子共、喜び勇みて帆揚の、祝の盃、めぐる間に。山川港に走入れば、船の檢め濟んで又、錨引乗せ眞帆引きは。風や眞艦に子丑のは、佐多の岬も後に見て、七島渡中も灘易く、波路遙かに眺むれば、後や先なる友船の、帆引つれて走りゆく。道の島々見渡せば、伊平屋波立浪押そへて殘波岬に走並で。あれあれ拜め御城元、辨の御岳に打つつき、エイ、袖を列ねて諸人の、迎に出たや三重城。

作者の朝寄は玉城朝薫と共に琉球組踊の双壁と云はれる。本土へ渡り謠や能舞を稽古し歸琉後尙穆主に謠曲を傳授したと云ふから、此の兩口説も何となく謠の

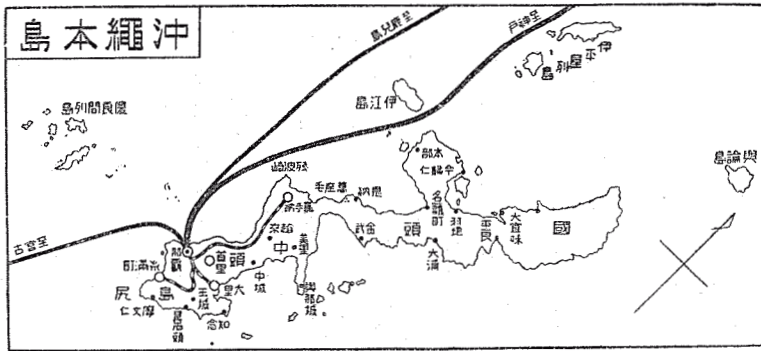
道行の様な處もある。

二、島の遠望

奄美大島は要塞地である、寫眞も摺寫も許されない
颯風の名所と云ふ有難くない名を戴いて居るが、軍事
上では重要地點である。何が故など云ふ事は我々直
接軍務に携らないものゝ喋々すべきでは無い。兎に角
「じゃに依つてじゃ」だ。暗に乗して一部隊を敵前上陸
させた我が〇〇丸は、夜の明けぬ内にと静かに名瀬の
港を出帆して南下した。一睡の夢まださめぬ内に甲板
では島が見えると大聲に話するのが聞える、立ち上る
と左舷にあたつて形のよい島が見える。島の名は徳ノ
島である。つゞいて沖永良部島だ、西郷隆盛の流謫の
地だ、更に輿論島があり、右手には伊平屋島がある。
御臺場の様な島だ、まん中にチヨコナンと岩山が一つ
あつて、周囲は青草が壘を敷いた様に連つて、ゾーツ
と平地になつてゐる。何故に作物を栽培せないのであら
う、人家もあるらしいのに。此の解答は讀者に御まか
せて態としない事にする。右手に細長い陸地が見え
る。之が沖繩島である。最北端邊戸岬から最南端コー
プサー岬まで三十五里程に及ぶ大きな島である。但し
幅は甚狭くて最も大きい處で五里餘、小さい處は一里
程の處もある。見渡したところ低いながらも山が屏風
の様に連つてゐる、高さも殆ど同じ位で五百米内外であ
る、海岸には珊瑚礁の一種環礁の一部らしいのが望
遠鏡裡に映つてゐる。海の色が其の内部と外部とで違ふ
のが面白い。純南洋の海岸の様な、熱帯樹が無いのが
何だか物足りない。山と海との間の狭い平地には人家
が點在し、芋畑らしいものもある。斜面に白壁の様なも

のが見えるのは墓である。墓の事は後で述べる機会が
あらう。

船が進むに順て島の村々が移り變つて行く、本土か

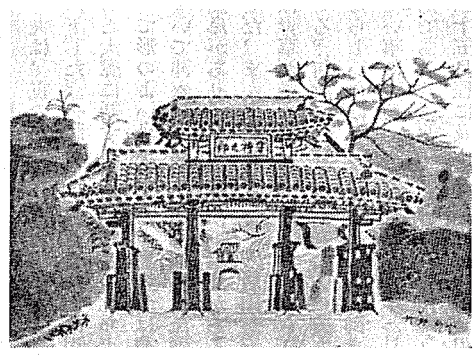


るのも無理は無さそうに思はれる。山が追々と低くな
つて遂には丘陵化した。那覇はあの岬を廻つたところ
だと、知らせてくれた事務長の言に、一同はうれしそ

うな顔をして上陸支度を始める。

さきに島の北部で見た五百米内外の山は古生層であ
り、今見てる丘陵や平地は隆起珊瑚礁と第三四紀層で
ある。又本島と薩摩との間にある諸島は火山岩から成
つてゐる。複雑な地質構造は以て各島に自然的特色を
與へ更に風俗習慣上の異風を現はして居る。武見理學
士は曰ふ「琉球列島は地體構造上の謂はゆる琉球弧で
…他の日本諸島と同様に太平洋の深海底の西壁上に
屹立しアジア大陸東縁に發達する大陸棚の邊緣に横つ
てゐる…その地質構成が三列の明瞭な帯をなしてゐ
ることは、小藤博士の指摘されたところである。即ち
琉球弧の内帯は火山岩、中帯は古期岩から成り、更に
その東側なる外帯には第三紀層が發達して三重の構造
的配列をなして、それ等は共的に圓弧を畫いてその
彎頭を東南に、太平洋に向けてゐる。…この島弧の
内帯に屬する火山島は北方の土噶喇諸島から連つて島
島、次いで伊平屋島、粟國島、久米島を経て西南端の
尖閣諸島に至るもので九州島の霧島山、開國岳等の火
山の延長と觀られ、臺灣に上ると大屯火山となつてゐ
る、中には現に噴煙をたなびかせてゐる口の永良部島
硫黃島、諏訪瀬島等があり、特に鳥島は明治三十六年
に大活動したことで知られてゐる。主として古生層か
らなる中帯には屋久島、大島、徳の島、沖繩島の大部
石垣島等が屬して本列島の脊梁を構成し、最外帯の第
三紀層から主としてできてゐるものとしては種子島、
喜界ヶ島、沖繩島の西南部及び西表島を擧げることが
できる。中にも最も興味あることは、他の内地で見
ることのできない珊瑚礁の發達してゐる點である…島

の面積の三分の二を古生層の五〇〇メートル以下の山地で占め、残餘は第三紀層を基盤とし狭長なる形状を示してゐる沖繩島は、周圍には到るところ隆起珊瑚礁が發達し、那覇附近のものは最高二〇〇メートルに及び、首里、中城の城址は礁冠の上に位置を決定し、隆起は削剝されて基底の第三紀層を露出するに至つた低地から屹立してゐる。東北端の邊土の岬の急海岸は同じく隆起珊瑚礁でその高さ約二〇〇メートルに達し、本部半島及びその周圍に散在する瀬底・伊江島の諸島では最高五〇メートル前後であつて、以下數段の



守 禮 門

海蝕段丘が見事に發達してゐる。かかる隆起石灰岩の地域はドリ、ネや鐘乳洞等のカルスト地形が見られ、普天間宮の洞窟はその一例であり。また地表面は滯水せず、乾燥して琉球松の疎林や蘇鐵が生えてゐるのが普通で地下水は石灰岩とその下の第三紀層との間から流出すること那覇の落平樋、首里城の龍樋の如しである。蛇足を加へる必要はあるまい。

三、爲朝渡琉

爲朝上陸地を教へられたが、爲朝は果して茲へ来たのであらうか。日本の正史には載つて居ないが、弓張月には本當らしく書いてあるのでそうかと思はせる。然し袋中の琉球神道記を始め琉球の正史たる中山世鑑具志頭温の中山世譜、琉球評定所の秘書球陽等には爲朝渡琉の事が明記してあるし、又舊記、仕置書等にも記載されてある。此れ等の記事に基いて新井白石の南島志、大日本史、或は支那人の書いた徐葆光の中山傳信録、周煌の琉球國史略や元史類篇等にも出て居る。事の眞偽を批判するのは史學家のする事だ。我々は夫れよりも此の英雄と此の島國とを傳説でもよいから、しつかり結び付けて置きたいのである。エタイの知れぬ古地圖の色別で國際間の問題が片付いたナドと云ふ話を聞いた事がある、傳説で領土獲得の時代をきめるなども例が無いとは云へ無からう。

前記各書の記事の代表として中山世譜の一節を抄録しよう。
 『南宋乾道元年乙酉、鎮西爲朝公、隨流至國、生三子而返、其子名尊敦、後爲三浦添按司、淳熙年間、天孫氏二十五紀之裔孫、爲權臣利勇所滅、時浦添按司尊敦、倡義起兵、來誅利勇、國人推尊敦爲君、是舜天王也、舜天登位、制度新定、國俗大革……又同書王統の系譜に舜天王姓源、號尊敦、父鎮西八郎爲朝公、母大里按司妹、宋乾道二年丙戌降誕、宋淳熙十四年丁未即位、宋嘉熙元年丁酉薨、在位五十二年、壽七十二』
 之れ等の書物より更に古いものに「おもろさうし」

がある、田島利三郎氏と其門弟伊波普猷氏の研究努力の結果琉球の古事記蕙葉とも云ふべき此の「おもろさうし」の校訂が行はれ帝國學士院の補助の下に刊行され、又「琉球聖典おもろさうし選釋」が大正十三年七月に出版された、「おもろさうし」は昔から島に傳つてゐるオモロ(唄)を國王の力で結集したもので異本が數部ある。其の内に「せりかくのろがふし」と云ふのがあつて、大和の御曹子が渡來した事を歌つてゐる。

『勢理客(今歸仁の地名)の祝女の、あけし(せりか)の對語)の祝女の、雨下し、鐵濡らして。運着けて、小港つけて、嘉津守嶽、雲低く、雨下し鐵濡らして。大和の、軍勢、山城の、軍勢、譯して見ると「勢理客の祝女がアケシの祝女が、禱りを捧げて、雨雲を呼び下し、武士の鐵を濡した、武士は運天港に上陸したばかりであるのに、祝女に嘉津守嶽にかつた雨雲を呼び下して、その鐵を濡した、この人々は大和勢である、山城勢である」と云ふことになる。

伊波氏の選擇は尙言を續ける「このオモロは暴風雨の日に、爲朝が運天港に上陸したといふ在來の口碑とも一致してゐる。或人は否さうではない、これは慶長の役に薩軍が運天港に上陸した時に呪つたオモロであるといふが、當時の琉球及び薩摩の日記類を見ると、この日は晴天であつたから、慶長役のときのオモロとは思はれない。また或人は、さうでなければ、その昔運天港に上陸した倭寇を呪つたオモロであるといふが、或はさうかも知れない、けれども、どこにも證據はない、これは強いて倭寇などにくつつけた方が、むしろ無難なやうな氣がする。……この爲朝のこの書いてある

神道記(袋中著)五の巻は慶長八年以前に一通り出来上つてゐたことがわかる。してみると今から三百三十年前には、爲朝に關する口碑が、比較的完全に遺つてゐたに相違ない、そして記録なども或は残つてゐたかも知れない。……明治時代の學者中で之を肯定したのは重野、久米、星野、幣原の四博士である。就中重野博士は其の薩摩史談集の中に、爲朝は薩摩の豪族、阿多の女婿であつて、鹿兒島城即ち城山邊にゐたのだから、彼が琉球の地理に明るくて、彼地へ渡つたといふことは有得べきことで、義經蝦夷落とは比較にならないといふことを述べて居られる。……畏友眞境名笑古君も云はれた通り爲朝の琉球渡來説の傍證として、海流の關係を念頭に置いておく必要はないだらうか……爲朝渡琉の傳説は本島の到る所にある。そして沖永良部にも、鬼界島にも、徳之島にも面白い傳説が澤山遺つてゐる。

爲朝に關する遺蹟も甚多い、浦添城の東北一里に牧港がある、爲期が琉球を去るに臨み歸帆を揚げた所で妻大里氏が一子尊敦を抱いて爲朝を追慕し數箇月の間其の再來を待つたと傳へる洞穴は「てらぬふら」といふ拜所になつて居る。始めから終りまで爲朝は琉球と切つても切れぬ間柄である。そして琉球が爲朝の爲めに征服された事は琉球人の得意とし自慢とし誇りとして居る處である、そして我等も亦昔からの日本人であると自負して居る。今回出征者の埠頭見送の盛大さは此の精神を如實に物語つてゐるのである。

四、那覇港頭

殘波岬から陸は入り込んで居る、順て其右手には廣

々と海が連つて居る。其の遙か向ふの方に、かすかに二本の高い塔が見える、あれが中央氣象臺沖繩支臺所屬の無電の鐵塔で高さは三百尺、入港の船からは二時間前から見えると云はれる。扱は今迄氣がつかかなかつたのは我々の迂濶であつた譯である。其鐵塔が一間一間と近づいて来るに伴つて、港らしい家の集りなどが見えて来た、かくて遂に船は港口へ来た。左に燈臺がある三重城と云ひ、右に舊砲臺がある、屋良座森城と云ふ。左右に相對して入港の船舶を監視して居るが、其基地は珊瑚礁で、一段高い處に望樓が作られて居るとは雖、下の方は波蝕の爲めにこわれ縊れて、波浪との激戦を物語つて居る。此の二臺は城とは云ふが日本流の城では無くて砦位のものである、天文二十二年倭寇防禦の爲め尚清王の時代に作られたもので聞得大君が親臨し、オモロを奏して祝したと云ふ處で、其後三年倭寇が來襲した時一撃之を撃退したと傳へられて居る、此の兩臺の間僅かに百間斗りで之が那覇港に這入る水路である。然し此の水路昔は暗礁が多く中央に岩があり、到底大船の出入は不可能であつたのを先年多額の費用を以て海底の岩礁を破壊し埠頭岸壁を作り今では三千七百屯の船が樂に出入出来る様になつたのである。即ち以前は自然の海上封鎖であつたのを掃海したのである、順て此後どんな事で、港で船を破る事があつたら一隻で直ちに港口が封鎖されるであらう、少々心細からざるを得ないが、夫れだけ要害の港だとも云へよう。

那覇の町は赤と白と黒の交錯から成り立つてゐる。赤いのは瓦の色、白いのは其間に塗つてある石灰の色、黒いのは珊瑚礁を手頃に切割つて積み重ねて作つた暴

風除けの高い塀の色である。家が低い、二階は甚少いから船から見た町は屋根と塀だけである、いかにも靜かなそして異風な町の趣である。背後は青い丘つきで木の茂つた處もあれば畑の様なところもある。其のところ々にくつきりと白い葉が見える。風も無い七月の午後、日照りは甚しいが平和な港だ。其處には病氣も不作も、人口過剰も輸入超過も無さそうに見える。また何十米と云ふ颱風などはどこへ吹くのかと思はれるが、物は中々見かけによらぬものだ、見たとこ



(沖繩縣兵衛津間) 樹子椰る茂

ろ樂土でも裏には苦惱が潜んで居る、支那の便衣隊の様、あらゆる陰鬱や欺瞞が隠れて居るとは扱も扱もだ、外面如菩薩内面如夜叉は此の南の島國までも傳はつてゐるのである。

いよく岸壁だ。人口六萬五千を有する琉球第一の都會で又港である那覇の岸壁には、我々を迎へに來た群集で一ぱいである。老若男女貴賤都鄙の上に、官民公私古今和洋さま／＼の服裝と、いろ／＼の面相を並

べて居る、其中で特に目をひいたのは、ものゝ本では
讀んでるし、話にも聞いている琉球純粹の裸足左衽で芭
蕉布の着物をはをり、手に入墨した老婆が可成りの數
で群集の中に混じてゐた事である。彼等は田舎で無く
ては最早見られないと思つてゐたのに、どうして／＼
この埠頭でゆつくり見られるとは、有難い様な嬉しい
様な氣になつた。そして彼等は其の異様な風體を別段
耻ぢる様子も無いどころか寧ろ得意で、港を狭しと立
ち並んでゐるのである。多分國粹保存の大精神の下に
洋服姿を異國振として排斥してゐるのであらうか。

裸足左衽等や男子結髪等は特に言ふにも及ぶまいが
入墨の事だけは少しく書いて置かう。尤も今は禁ぜら
れてるから若い二、三十代の連中の手は全く奇麗であ
るが、五、六十以上の老人の手は大抵模様がである。
琉球列島の島々で模様が異り又同じ島でも村々に由
て多少は異なるらしい。上陸後市中でも汽車中でも屢々
入墨の手を見たが成る程少しづゝ異つてゐる。残念な事
には、ゆつくり調査する暇が無かつたので詳しい事を
實際について云ふ事は出来ないが、先人の調査に依て
大體の事はわかつてゐる。

抑入墨の記事は古く袋中の琉球神道記に出て居る、
『又女人ノ針衝ハネツク（女人ハ掌ノ後ニ針ニテシゲタツキテ
墨ヲサスナリ）何事ゾヤ、傳聞、胡國ノ女人形醜シ南
國ノ女人ノ美ニシテ色白キト齒ヨリモ過タリト聞テ
己ガ齒ヲ黒メテ白ヲ顯也、南來ノ雁マデモ戀テ含墨ヲ
加禰ト名ク即雁音也、倭國ニ是ヲ傳ト云々』又隋書の
流求傳には「婦人以墨黥手、爲虫蛇之文」とあるが之
は臺灣のことだとの説もある、喜舍場朝賢翁の續東汀
隨筆には「女子既に人に嫁すれば即ち左右の手指表面

に墨黥す、之を波津ハツ幾と言ふ、鍼衝の中略なり、婦女
最も愛好す、若し久しく白指なるものは、姉之を笑
ふ、故に二十一を過ぎて墨黥せざる者なし、隨書流求
傳に婦人手に墨黥して梅花の形を爲すと、上下の遺風
なり、既に黥して數年を経れば、墨色淡薄になる、再
び黥して新鮮ならしむ、既に黥して五、六回に及ぶと
きは、終身淡薄になる憂ひなし、置縣の今日に至り人
身墨黥するを許さざる法律を發せらる、若し之を犯し
及び之を業と爲す者は捕へて處刑せらるゝに付き、終
に其惡弊を止めたり」とある。伊波氏は曰ふ「當時は
初めて入墨する時は閑靜な別荘などを借り親戚縁者を
招待して、御馳走しながら施したものであるが、入墨
をしない内に、死ぬ者があつた場合には、そのまゝで
いくと、あの世で、葦の芽を擲らせられる、といふの
で、死人の手の甲にその紋様を畫いてから野邊送り
したものである」と。

入墨に關しては有名な次の傳説がある、其の話を喜
納綠村著「南の昔話」から抄録しよう。

『人皇百五代後奈良天皇の御代室町幕府は義晴の頃、
沖繩では尙圓王の孫、尙清王の時、今から恰度四百年
前のお話であります、沖繩の最高の神官、王女であ
る聞得大君が久高島に御參詣に行かれました、處がに
はかに暴風が起り、聞得大君以下の人々の小舟は、波
の弄ぶがまゝになりました……二三日の後薩摩の濱邊
へ漂着いたしました、……薩摩の殿様は、お姫様が
りつばな方だから、奥方に仕度と思はれ、早速姫様に
其の事を申しましたが、どうしてもお聴入れなりません
……恰度其の時國頭親方正格といふ方が薩摩に居ま
した……國頭親方は、殿様のお前を退つた後、聞得大

君御殿に手紙をやつて、手の甲に入墨する様にと、い
つてやりましたので、姫はコソコソ手の甲に入墨を致
しました、やがて殿様の御前へ出て、御酌をする事と
なつた時、長い袖の中から眞黒くなつた入墨手を出し
ましたら、殿様は吃驚して此女は不具者であつたかと
直ぐにつき戻しなさいました、國頭親方は聞得大君御
殿と共に秘かに喜びました、そして親方と一緒になつ
かしい沖繩へ、女の第一に守るべき貞操を全うして歸
る事が出来ました、其の事が沖繩中に廣まり、女が結
婚したら屹度手の甲に入墨することになつたと言ひ傳
へて居ります。』其他種々の傳説があるが要するに入
墨は貞操保護の目的が始めであつたらしいと云ふのが
定説である様だ。（未完）

送人從軍

藤澤黃坡

壯士從軍豈願身
期君善戰勇而仁
仇吾即敵親吾友
元是同文同種人



フィラックス物語

講師 村田 數之亮

(一)

ギリシアやトルコ（私は小アジア海岸地方しか知らないが）の史蹟を歩くと、そこには監視人といふか番人といふか、史蹟守がある。彼等のことをギリシア語でフィラックスと呼ぶが、言ひなれるとこの語に何となしに懐味が湧いてくるまゝに敢へてフィラックスの語を用ゐた。二ヶ月半に亘つて中部ギリシア、ペロポネス半嶋、クレタ嶋、そして小亞細亞と史蹟を巡つてゐる間に、恐らく數十人の彼等に會つたであらう。そして私が見るんだから紀元前のもの許りだが、その數千年前の荒廢毀損された古代豪華の今はわびしい遺蹟とゞもに、各地フィラックスの風格が甚だ懐しく思出に残るので、この駄文を弄したくなつたわけである。

私は何も服務規定を讀んだわけではなく一人きりだが彼等の役目は史蹟見物人が遺蹟遺物を損傷しないやうに、また土民が史蹟荒しをやらないやうに見張をし、また戸などを施した特殊箇所があればそれをば開いて見せてくれることである。史蹟で入場料をとるところ

は、私の経験内ではアテネのアクロポリスとケラミコス墓地、クレテのクノッソスとエフェリス？位だつた。大抵の史蹟は粗末な柵か垣かであつて、日没位で戸を閉ぢるから、月明のコロセウムに感激してローマ史を書いたとかいふギボンのやうな特權は幸か不幸か私は享受し得なかつた。尤もアテネのアクロポリスは満月の頃二、三日は開放するが、一度は旅行中で、一度は獨立祭の照明やその準備で機會を逸して了つた。しかし入れなくても明月やアクロポリスを巡りて夜もすがらの漫步は素晴らしいものだつたし、照明で夜空に白々と照し出されたバルテノンの姿はえらく生々としたものだつた。と書き出すと我が貧しき詩囊の耐ゆるところでないし、脱線にもなるので止めよう。それで大抵の遺蹟は人家にはなれた境にあるので、彼等は城内にさゝやかな家を持つてゐる。山國アルカディアの荒涼たる山稜にポソンとあるバツセーだの、クレテの海岸の小丘にある古代聚落の蹟グルニアだのは人家から數里もあるし、小アジアのエフェソスにしても村から一里餘の峽間で夜の淋しさは思ひやられる。しかし何

紀南さころどころ

田邊 信太郎

澤蟹とわらべあそべり夏ふかく山ふところ
の晝のわびしき

山宿の夕餉タマゴまちゐてほのくらみ杉の梢の霧
ごもりけり

あかりゆく疊りの朝の山の峽ながれ筏は火
を焚けるかも

山峽に家居ちりばひ水くらくよどみて夏の
朝ひそかなり

朝やけの風おだやみてひえびえと入江の潮
のみちきたるかも

目のかぎり日は照りあつゝ岩ヶ根の潮泡だ
ち流れながるゝ

洋オセアなかに舟ゐるらしも日照り波まぶりがり
つゝまほにしみれば

遠眼鏡あてゝみつれば燈臺のかたへの村は
網曳アミヒしてをり

といつても國家の役人として徽章を持ち、特定の制帽制服——多くは詰襟服に學生帽型——を與へられてから、勿論毅然として我任や重しなのである。でも大抵は平服の人のいゝ田舎者で甚だ助かる。雜草が繁つた草原に建築の土臺や壊れた壁、倒れた柱などが散亂してるといつた數十年前の文字通りの遺された蹟に颯爽たる監視人などゐては興冷めで怖氣がついてゆつくり見てゐられない。でなかつたからこそ私もソイラックス物語に彼等への回想を寄せようといふものだ。

(二)

敢へて私の好みから言へばソイラックスは目立たぬぞよしである。案内書を持つて、それを讀み乍らといふより、且つ讀み且つ見てまはるのは何と氣持のいゝものだらう。幸にギリシアの空は絶對的に快晴だから疲れ、ば、三月から五月頃までなれば草の上に寝ころんだり、大理石の軒廻の破片に腰かけたり、大きな柱身の影に目をさけたりできる。そしてはまた氣付くまゝに後かへりして見なはず。燦々と輝く日光の下に數本のドリア式柱と眞白な大理石の壁の殘片が、白赤紫黄と咲きつめた草の褥から抜き出でゐる、凄い岩山の肩に白雲一片、人影もない閑寂な周圍。こんなところにソイラックスは無用だ。大體訪ねる人の多い遺蹟ではソイラックスはボカンとして日影に煙草でも喫んでゐる。アテネではこの遺蹟の彼等もまるで印象に残らぬやうな存在だつた。絶えず見物人が來るところで一人の人に目をつけてたら神經衰弱になるから、この狀態が自ら自他共に助るよき方便を生んだのであらう。デルフイ・オリムピアの彼等も何れもこの類だつた。

この二者はアテネのアクロポリスと共にギリシアの三大遍歴所だらうから。オリムピアの遺蹟は町端の松林……といふより發掘後に植ゑた松がよく育つていゝ林になつてゐる——の中にあるが、夕方になるとソイラックスが笛を吹いて退場をうながしてゐた。ゼウス神殿の巨大な階段に腰かけてゐた二人は伸々腰を上げなかつたが、それでも傍へ行きもせず、でも氣になるかそちらを見乍ら同じ調子で笛を吹いてる彼だつた。

クノッソスはクレテ第一の都會カンデリアから一里餘の低い山の峽間だ。エヴァンスの努力はそこに紀元前二千年頃の大宮殿を再現して、數層建築、大甍の並ぶ倉庫、復原されて一寸毒々しい程に生々しい色彩の柱や壁畫のある支關や室が、一町半四方位に亘つて展べられてゐる。その代りこゝでは入場料五〇ドラクマ(二圓五拾錢位)を支拂はされるが、こゝのソイラックスも甚だ好感の持てる男だつた。お役目が許せとでもいつたふうに遠くはなれてついできて、玉座室の戸を開けてくれるのだつた。クノッソスはエヴァンス以來英國の仕事場で、今もアテネ英國學會が小さな發掘をやつてゐるが、彼の男は英語もしやべらず、問へば言葉少なにギリシア語で答へた。なんとはなしに英國人のお仕込が感ぜられた。小さな身體をカーキ色の制服につゝんだ中老で、新來の人が入つてくるとそちらへ行つて了つたが、二度目に行くと唯挨拶しただけだつた。クノッソスにはこの所謂ミノス宮殿の他の少しはなれて離宮とか邸宅とがあるが、それ等には番人はゐず、よく復原されてゐるまゝに、一寸空家のやうな氣分がした。

ソイラックスも長年多くの見物人を見てると大體の



り便オネルポ
巖 島 元

(前略)昭和十一年三月卒業と共に初夏へのテンボを急いでゐた内地を後に、而も好き内助者を得て、幸福に滿されながら一路、父の經營してゐるゴム園に到着したのは、丁度昨年(一九三〇年)の七月でした。も早一ヶ年を経過して仕舞ひました。神戸から門司、上海、香港、新嘉坡を経て當蘭領西ボルネオ島ボンテナナ市に踏込むまで丁度十七、八日掛りました。横濱から桑港に行く位の日數でせう。それも其の筈です。新嘉坡で日本郵船の鹿島丸を棄て、約三日間船待ちの上、和蘭汽船に乗換へて來たんですからこんなに永く掛つた譯です。ボンテナナ市は約十萬位の人口で西部ボルネオでの第一の開港場です。輸出入業及大商店は、支那人で其の他に日本人、印度人の雜貨反物屋があります。前記の支那人に對しては齒が立ちません。實に支那人の發展は想像以上です、金満家と云へば支那人を第一位に擧げて過言ではないでせう。

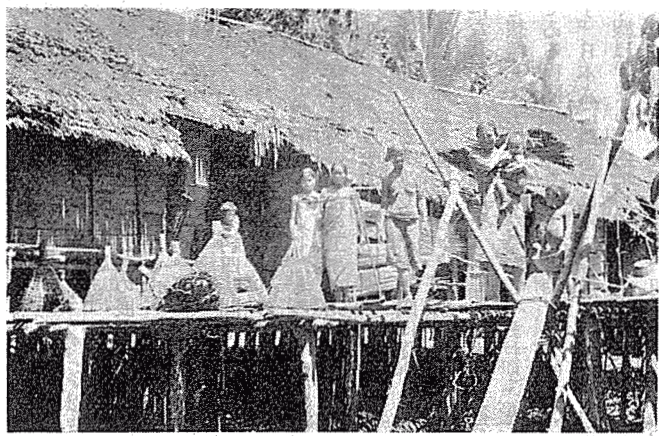
どんな山の中の寒村に行つても支那人の居ない處はなく、土人との間に物々交換をやつて結構幸福に暮し

見當はつのは當然で、クレテのアギア、トリアダの彼はすぐに私を見限つて了つた。こゝはフェストス王の離宮かと言はれる。小宮が簡單明晰な蹟を残してゐるが、メッサラ平野のオリヴの緑青越しに、イダ山の黒鐵のやうな屋根型、その左にフシロリテイスの雪の斑な高峰に對し、西方には矢張りオリヴ畑越しに地中海が霞むといつた絶勝の地だ。遺蹟の全貌を足下にした松の木蔭の茅屋の前に椅子を持ち出して蕩然としてゐた彼だったが、恰服のいゝ身體をクレテ服——下すべ濃藍の袴、巾廣の帶、袖のつまつた短く黒い前開きの上衣——長靴にかためてギリシア獨立戰當時の勇士みただつた。私が行くと椅子を持出したり、コーヒーは尋ねたりするのだつた。初め少し案内説明してゐたが、面白半分にもちがが説明してやつたりするので、後は馬子と縁蔭で雑談をしてゐたが、新來の客が來たのをしほにそちらに付いて、今度は得意に説明してゐた。彼はフランス語を少し語る。尋ねると世界大戰當時サロニカに戰つて佛兵と接して學んだといつてたが、その後小アジアのマグネシアで案内したトルコ人のフィラックスが英語を少し語るのので、尋ねると矢張り大戰の時アドリアノブルに戰つて學んだと言つてゐた。私はアギア・トリアダのことと思ひ合せて世界大戰の効果をとんだところで見ると苦笑したものだつた。

(三)

遺蹟の中ではとても廣範圍でフィラックスに案内さす方がいゝ所もある。尤もどこでも彼の許可を得て入るわけではあるが、時間と勞力の上から、殊に小アジア

アは彼について一應の道順を追ふ方が手取り早かつた。エフェソスの遺蹟は一巡でも一里以上に亘るのでジード・ブルの地圖では容易に見當が付かず、ひどいアザミと茨と藜畑の中を犬に吠えられ乍らうろついで、眞夏のやうな五月半の太陽に汗は出る、咽喉はかあくが、水はどこにもなし、肩のリックサックは重くなるで困つたので、爾來小亞では多くは彼等の厄介になつた。水のないのも、五月半ともなれば夏の覺悟を要することもギリシアと同じことだが、訪れる人が少いだけに道が悪く、夏枯の禾本科植物とかアザミ類には泌々と登山の身仕度の必要を感じたのだつた。フィラックスが案内ある場合、彼等の外國語は舌足らずに限る。どうせこちらも舌足らず仲間だから恥氣もなしに半可通のギリシャ語、フランス語——バルカン方面で第一の外國語はフランス語だ——で辛じて應酬ができませんから氣樂でいゝ。「大變よろしい」は英語では、獨語では、佛語ではこうだなんて教へて得意にもなれるが、また「貴方はギリシャ語は少ししか話せぬと言つたが、成る程少しだ」なんてトルコ人に餘りに正直にやられたりするが、こんな話を混合語でし乍ら案内されるのは一寸いいものだ。街道を共に歩くのだと饒舌る時間が多くてその間にこちらの語彙の種が切れて困るが、そこは遺蹟だから彼等にしゃべらせて、分つた顔と返事だけで誤魔化される。ともかくこんな程度の彼等だと、氣にせずにもこちらの勝手な見方ができるのが一番いゝのだ。またその内に意志が疏通して特別入念に見せられたりする。尤もこうなれば、或はそのためにだと言つて了へばしまいが、少々の心付はやらねばならなくなる。



部一の落部ヤイダ

てゐるんです。こんな工合で支那人の勢力は南洋では大したものです。日本人は約四、五十人居りますが主として農園を持ち、ゴム、胡椒、椰子等の栽培を行つて相當の収益を擧げてをります。而も最近、軍需工業の發達に伴ひ、一般物産にも影響して當地市況は一般に活氣を呈して參りました。六ヶ年間の不況時代から開放されて一般市民は、殊に主人に到りては、此の時とばかり装身具の買集めにやつきになつてゐる様な有様で金がなくなればゴム園に雇はれ、金がたまれば町に出て買物すると謂ふ鹽梅で、少しも貯蓄心のない

デイデイマといへば鐵道の終點セケといふ村から約五、六十軒。メアンデル河が作った草茫々の草原を放牧の牛をよけたり、駱駝に會つたり、羊番の猛犬に吠えられたり乍ら横斷し、更に丘陵地も過ぎて達する寒村だが、ここに素晴しく美事な、またギリシヤ時代最大の神殿の一だと稱されたアポロン神殿がある。十本に二十一本計百二十二本の柱の基臺が七段をなして高く築かれた大理石の床の上に整然と並び、その内の三本は今も二十米餘の高さを紺碧の空に見上る許り。背の高い頭の少しはげ上つた五十位の男が古背廣を着て、英語とギリシヤ語交りで説明し乍らニコノ／＼し乍らつてきた。そして草の中に横はつたメドウサの顔を寫眞にとらうとしたら、邪魔になりさうな草を取つて、そして自ら横にポーズを取つて立つたのだつた。

私にはあの無精鬚といやに荒い縞の古背廣と日焼した廣い額とが、この時のポーズと共に懐まれる。

デイデイマから海に臨んだ丘陵地を途中でモロッコ邊りの活動にでも出てきさうなトルコ兵の監視所で旅行許可書と顔實見をしてもらつたりしてミレトスにつく。冬の雨期になれば大部分の遺蹟は水中に没するが夏枯の今は池の中にある部分はいく。眞夏みたいな強い日光が午後二時三時といつた頃は焼くやうだつたし朝早くからクタクタになるやうな自動車の旅で、仲々史蹟巡りも辛いと思つた。辨當はトルコ式にパンと酸っぱいチーズ、それに特にサーデインとネーブルを持つたが、カフェーで食事をすれば蠅が食べてるパンに迄止つて動かない程。でもレモナードと稱して土瓶の水に溶してくれたその飲料の甘さ。小男の粗末なカーキ色服を着てそのカフェーにゐたのがフライラックスで

廣い遺蹟をアクロポリスにある劇場から初めて市場、會議場、ギムナジオン、アステレピオス神殿、デルフイオン、スタディオオン等々と歩き廻つたのだが、寫眞をとるといへば暑いの詰襟をとめ、衣服をととのへるのだつた。そして暑さに閉口して休めば、共に腰かけて話すのだつた。デイデイマにしる、ミレトスにしるこんなところは訪ねる人とは稀だから、彼等フライラックスも人懐つこくて、丸で田舎人の道連れを感じせしめた。

クレテのハギア・マリアは島の東海岸、カンデイアから自動車で一時間半位、數百の風車が海岸の平野に動くのは壯觀だつた。ここにエーゲ文明時代の大宮殿の跡がある。クノッソスに次ぐ規模の大さだが、壯麗において劣る。マリアの村からフライラックスを車に乗せて村はづれの遺蹟に來ると、平地にあるこの宮址はさはやかな四月末のギリシアの空の下に此上なくすがすがしい。濃碧の海近く、廣い中央廣庭を圍んで倉庫敷石の残る室、階段、角柱が並ぶ部屋、厚い壁の廊下などの上に海風が心持よく吹いてゐた。復原された一室には最近發掘された土器が數多く並び、その瓶の中には數千年前の穀粒が黒焼になつてゐる。私がそんな土器などを見る間、彼は土器を整頓したり、掃除をしたりしてゐて、出る時にはその穀粒を紙につつんでくれた。見物人は私一人だから、こんな時に何とかして土器の一片でも土産にならぬでもないと思つたがそれには私のギリシア語が不充分である、村童二、三がこの珍らしい東洋の珍客をし切りに見てたし、また彼は無口の余りに人のよささうな小男だつた。

要領のよいのはハギア・マリアへの途中のクマサの

のが特徴です。人種は、馬來人、和蘭人の外、日本人は勿論、支那人、印度人、獨乙人、英國人、瓜哇人、スマトラ人、マドラー人、メナド人、ボギス人、アンボン人等でまるで新嘉坡同様な展覽會の様です。父が開拓したゴム園と謂ふのは、ボンテアナ市から約河を一日一晚小蒸氣で溯るとシガバンと云ふ小村に到着します。そこから丸木船で約四時間漕いで上るとスボバツと謂ふ村に辿り着きます。其の村の一角に約八十英加の土地を開墾して獨立したもので、實に汗のかたまりで、僕等は其の土台の工事の完了し而も收益の擧る様になつてからやつて來たのですから、全く有難い譯で感謝してゐる次第です。ゴム園に従事してゐます苦力達は全部食人種であるダイヤ族です。食人種とお聞になれば、すぐあのジャングルに出て來る瘴氣な土人を想像しますが、實際交際してみますと、決して想つてゐる程瘴氣でなく、とてもおとなしい、いゝ人種です。日本人に對しては特に尊敬の念を持ち、忠實に働く様は、まるで内地の田舎の人達と交つてゐる様でとても、したしみを感じます。祖先に於ては人を食したでせうが、いや實際、今でも部落に行きますと、天井の隅に饞饉の黒ずんたのを見受けますが、現在に於てはそう云ふ事は絶対になく、親爺も約二十五、六年間住んでゐますが、斯るうわさは未だ聞かないと謂つてゐる事でもよく判る事と思ひます。同封の寫眞でもおわかりになります様に、彼等は部落に於ては裸體で暮し、家屋は概ねアタブ葺と謂つて椰子樹に屬するサグの樹の葉で葺いて居り、床下は約一間半位地上より揚げて建て、雞や豚を養つてゐます。大抵五十間位の長屋住ひで、中は四、五十の部屋に分たれ、丁度内地

彼だつた。よしず張りのカフエーにみた彼はクマサの小さい住宅址を案内すると、その傍の番小屋からクアントウデイデスの發掘記録を持ち出して見せてくれた。彼はクレテの服装をした片手のない堂々たる身體の老人だつたが。

(四)

それぞれの土地に、土地の空氣と古い遺蹟の臭に満足したやうな人々を見出すのは嬉しい思出だが、私は彼等にギリシアでもトルコでもその間の差は少しも感じなかつた。共によき肌ざはりのする素朴な人間を感じただけだつた。しかし殆んど例外的に案内者氣取りで説明するファイラツクスがある。こんな連中は必ずフランス語が得意で、服装も必しも埃つぽくない。

クレテのフェストスの一人は私が會つた唯一の青年ファイラツクスだが、青味がかつた鼠色の制服がよく身につけて、兩手を組んで、靴音を廣庭や石階などに律動的にコツン／＼と立て、歩く様は、士官學校の學生を思ひ出して仕方がなかつた。またベルガマ(ベルガモン)のアスケレピオンの彼——アクロポリスの方の彼はまた氣さくなく除隊兵士みたいな感じの男だつたが——は壯年のスツキリした身に乗馬靴がよく似合つて騎手のやうだつた。共に身を持つること端嚴で、草深かき地には似合はぬ整つた制服を着てゐた。フランス語を自分よりうまく饒舌られては癪でもあるが、それよりも案内者を以て任じてるから説明をすると、すぐ次の場所に行つて、待つてゐるから、落付かなくて困る。引張り廻されることの嫌な私は、彼等が何を饒

舌つても「ウイ」「ウイ」の一點張りで、見たい箇所では勝手に長く見たり、本を讀んだり、ノートを取つたりした。すると根まけして、説明も餘りしなくなり、先導を止めて後からついてくるのだつた。でも彼等ともいゝ人間だつた。青年はイダの山へは私が案内しようかと言つたし、壯年は名簿に署名を求めたりした。

(五)

以上の外にも印象に残る彼等がある。ベルガマのアクロポリスの彼、一寸みたエフェソスの彼、アテネの風塔の所にゐる赤眼の爺、ディオニスス劇場の小使みたいいまでもニコ／＼してる男、プニツクス丘の男、またオラムペイオン、ゴルティン、テイリツクスの彼等も思出される。何れの彼等も皆いゝ人間だつたと思ふ。商賣上手のギリシア人も近代文明の先端を行くアテネのスタディオを通りを散歩するギリシア人も、また冷かに嚴格なトルコの役人も回教國の一種の臭氣も何れとも縁のないファイラツクス達だつた。偽りも、怒りも、また打算も嘗て經驗したことのないやうな彼等だつた。ただ來る日も來る日も春夏秋冬、數千年前に古人が營める豪華壯觀の跡を守る墓守として、しかも虔しやかな墓守としてのみの日に安んじてる彼等だつた。そして私は思つた彼等に守られる限り、これ等の跡は世界人類の共通の財寶として安らかにあるであらうと。

(二五六、一九三七) ミュンヘンにて

のアパート式の様な建方ですが、感心な事には餘り隣同志の喧嘩もなく、至極く平和に住してゐるのは、うらやましい位です。

常食としては米を食べますが、此の米は山を切り開いて焼いた跡に植ゑるのです。一遍植ゑた處にはもう再び作りませんので、森林は段々若山として新陳代謝して行く譯です。こんな譯ですから和蘭政府も、水田の方法を講ずべく技師を派遣して考究してゐる有様です。副食物は胡瓜、なすび、南瓜、冬瓜を栽培し、豐作の場合は賣り捌く爲めに町に出て來て幾何かの金を得て歸るのを習慣としてゐます。併し支那人が大分智恵を付けて、此の頃じやや計算的になつて來て困りますが、まだ／＼素直な點があり、したしみやすい人種です。暑いには着いですが、割合風が涼しいので南洋に居る氣持は少しもしません。そして時々豪雨が大自然を洗つて清々として呉れます。まことに樂天地です。今日本ちや蘭領ニュギニア方面に或は又委任統治の裏南洋にのみ力を入れて居りますが、表南洋而も西ボルネオは將來日本人の好き發展地として推奨しても間違ひでないと思つて居ります。狭い内地にゐて理窟を並べてゐるよりは、むしろ大手をひろげて待つてゐる表南洋に御發展あらん事を切望致します。オー關大の健兒諸君、赤手空拳は昔の夢ですが、好きチヤンスと、幾何かの資力がありましたら、ぜひとも御渡南あらん事を期待致します。蘭印入國の件は左程内地で考へてゐる程六ヶ敷くありません。正式の手續さへ怠らなかつたら誰れでも這入れます。(後男)

昭和一二、七、三〇



第二學期始業

第二學期授業は大學各學部は九月十五日、第一及第二大學豫科は九月十一日、専門部第一部及第二部は九月十三日より夫れ々開始した。

夏期語學講習會

第十五回夏期語學講習會は七月十五日開講、八月三日終了した。終了當日午後六時より講堂に於て終了式を舉行、神戸學長より修了證書を授與し、訓辭ありて七時閉會した。

英語科 五一九名
獨語科 七二名

尙英語科は八月六日修了試験を施行し、合格者には八月十六日合格證書を授與した。

専門部國漢科 國語中等
教員無試験檢定資格認定

豫て申請中の専門部文學科國語漢文專攻科卒業生に對する中等教員國語科無試験檢定の件は昭和十二年九

月七日文部省告示第三百十六號を以て昭和十二年三月以後の卒業生に對し師範學校中學校高等女學校國語科教員の無試験檢定資格を許可せられた。

研究生制度設定

本學にては今回研究生制度を創定し、七月一日附を以て左記の通り研究生を命じた。

法文學部研究生 上田 廣 藏

國防獻金

刻下の非常時に際し學國一致奉公の至誠に盡すべき秋に當り本學教職員一同は夫れ々々々月俸の百分の一を國防獻金として八月廿四日大阪朝日及大阪毎日兩新聞社を通じて獻納した。

南莞爾氏

洋畫寄贈

會て獎學資金を寄附された明治三十四年卒業生にして本學協議員東京火災保險會社長南莞爾氏は、今回片岡銀藏畫伯滯佛中の大作壁畫「泉」、及び橋作次郎畫伯昭和九年帝展入選油繪「夕映」の二名畫を寄贈された。片岡畫伯は舊帝展常連作家にして特選二回、橋畫伯は現在旺玄社同人にして舊帝展に入選すること五回に及んでゐる。(本誌本號表紙裏寫眞は橋氏の「夕映」)

召集軍務公用者

支那事變軍務公用者として、應召出征の本學教職員並に校友學生諸氏の中、判明せるは左記の通り(九月八日)

教員

金子又兵衛 専門部講師
柏井 象雄 同
竹腰 吉治 學生主事補
宮崎 藤平 同
石川 登 關西甲種商業教諭
中井三之助 第二商業教諭

校友

福部 知一(大一大商) 木村 彌策(天一五專商)
横田 義徳(昭三 專法) 福本 眞一(昭三 專經)
森田 忠男(昭四 大經) 西田 利廣(昭五 大法)
尾坂 照雄(昭五 大法) 平池 勝(昭五 大法)
藤井 長(昭五 大法) 山本 喜一(昭六 大法)
小倉 武雄(昭五 專商) 福原菊治郎(昭六 大法)
小西 頼人(昭六 大法) 石田 孝之(昭六 大法)
吉橋 鐸美(昭六 大法) 福井 文雄(昭八 大法)
松本 重雄(昭六 大商) 安達 一也(昭八專一商)
田中 謙二(昭八 大經) 長棟 重利(昭九 大法)
渡邊 博(昭八專一商) 福田 金治(昭九專一商)
千原 清治(昭九 大法) 辻本 豊七(昭九專一法)
神谷 弘(昭九專二法) 村上 好雄(昭十 大法)
村上 好雄(昭十 大法) 田邊 數男(昭十專一法)
松川 義雄(昭十專一商) 木船 信男(昭十一 大法)
井上 次郎(昭十一 大法) 三田 至(昭十一 大法)
藤田 學(昭十一 大法) 上村 永康(昭十一 大法)
大旗 正敏(昭十一 大經) 戰死 九月二日
遺族 鳥取縣氣高郡大和村玉津、父大旗鐵太郎
中田 治(昭十一專一法) 高見 周造(昭十一專一法)

近藤 孝(昭十一)專一經 梶木 省吾(昭十一)專一經
 竹田 達郎(昭十一)專一商 三浦 益次(昭十一)專二法
 清水 猛(昭十一)專二法 小池 一洲(昭十一)大法

在 學 生

中村 寛一(學部)法二 中村光太郎(學部)法二
 谷 良二(學部)法二 枝廣 武夫(學部)法二
 島邊 一松(學部)法二 中野 文吉(學部)政二
 五十川 勝(學部)政三 吉富 得藏(專一)法二
 寺尾 愈(專一)法二 福井 正義(專一)法二
 高山 政明(專一)商二 綱島 信雄(專一)商二
 大田 雅一(專一)法三 藤原 一馬(專一)法三
 高木 薰明(專一)法三 門上 敏夫(專一)法三
 竹立 種一(專一)法三 渡邊 正重(專一)法三
 内海 完一(專一)法二 青木奈良一(專一)法二
 乾 唯義(專一)法二 渡邊 滿雄(專一)法二
 川島 隆(專一)法二 田中 三郎(專一)法二
 間 要(專一)法二 千葉 盛晴(專一)法二
 谷木 晋(專一)法二 虎谷 明(專一)法二
 佐野 豊(專一)法二 澤田辰太郎(專一)法二
 中村 彌一(專一)法二 重本 幸雄(專一)法二
 村上源治郎(專一)法二 和田 治夫(專一)法二
 川西惣太郎(專一)法二 坪木 六郎(專一)法二
 島山 兼二(專一)法二 松本 春明(專一)法二
 岡田 益賢(專一)經三 山上 敬一(專一)經三
 高橋 行夫(專一)經二 丹 幸男(專一)商三
 藤原 隆雄(專一)商二 古川 一男(專一)商二
 葎井茂一郎(專一)商二 永井 正水(專一)商二
 松下芳太郎(專一)商二 棚池 信一(專一)商三
 富塚 豊(專一)商二 永原 六郎(專一)英二

校 友

校友會常議員會

七月八日午後五時より天六學舎本部會議室に於て校友會常議員會を開催、校友會館建設並に校友會會則改正に關し協議したる結果、委員を選んで調査研究することとなつた。

尚校友會館建設資金として昭和七年三月以後専門部卒業生より據金せられたるものは本年六月末現在にて元利合計金五千六十圓七十錢に達してゐる。

因に當日の出席者

神戸 正雄 岩崎 卯一 糸島實太郎
 織田佐代治 大月 伸 渡邊 博
 河村 宜介 武田誠之助 内藤 正剛
 松本標四郎 藤本 峯雄 南 浩
 三島 律夫 樋口哲四郎 關 豐馬

尚校友會館建設調査並に校友會會則改正に關する委員は校友會會長より左記の諸氏に委嘱せられ、第一回委員會は第二學期早々開催の豫定である。

糸島實太郎氏 岩崎 卯一氏 織田佐代治氏
 大月 伸氏 渡邊 博氏 河村 宜介氏
 内藤 正剛氏 藤本 峯雄氏 樋口哲四郎氏
 關 豐馬氏

大 連 支 部

七月二十三日午後六時より、中央ビルに於て母校學生歡迎會並に第十六回秀麗會を開催す。非常管制もやつと解除されて幾分悠つたりした氣分で五階ベランダに卓を圍み涼風を満喫しながら、久振りに母校の學生諸君を中心に打寛いで語り會ふ機會を得た事は何より喜ばしい、平井君立つて今回の歡迎會は學徒至誠會、天六第一部辯論部員、關大拳闘部員の諸君を多數迎へて近來稀なる盛會を心に描き乍ら待ちに待つてゐたものであるが、種々な事情事故が発生し、期待が全部齟齬して了つた事は實に残念であるが、幸ひ皇道至誠會委員長である佐藤丈夫君が、至誠會の滿洲行中止になつたにも不拘、單身奥地滿洲を視察に來たる其の意氣其の志の壯なる、充分所期の成果を收め無事歸校せん事を希望すれば、全君答ふるに自己の決心と大連上陸第一歩の初印象を以てする、又飯野君からは今回の新東洋拳闘會より招聘され其の試合準備のため渡滿してゐたるも、中止の已むなきに至つた経過報告があり、武笠君は自己の専門經濟の角度から大連滿洲を見、劍道部の吉村君は失敗談を夫々和やかな零團氣の裡に愉快なる時を過ごし、最後に學歌を高唱し、午後八時半散會す、出席者左の通り

學生側 飯野重則、佐藤丈夫、武笠尊雄、吉村浩一
 校友側 高塚源一、高濱直一、岡田 勇、木村儀八、秀島全治、高木嘉一郎、福部 肇、直吉己一郎、中野英一、光井章

雄、三橋正實、平井三郎

愛媛支部

愛媛支部總會第十二回を、八月八日風光明眉の越智郡波止濱公園頂上渦潮樓で開催した。先づ一同零時半に今治驛前二葉に集合小憩の後、自動車にて波止濱に至り、先づ一同記念撮影の後、長井幹事開會の挨拶を述べ、長井常任幹事より會計會務の報告があり、市村支部長の挨拶があつて、開宴一同學生時代の昔話や發展しつゝある母校の現況等を語り、時刻の移るを忘れ午後七時藤高豊作氏の發聲で、關西大學と校友會愛媛支部の萬歳を三唱し閉會した。

(出席者) 丹 晶、黒川孝三郎、和田南冥男、矢野熊一、日野福松、長井鹿義、中村素芳、白髮、茂、藤高豊作、瀧 勇、中川五郎、長壁友市、市村敬夫

九年法會

大正九年法律科卒業生を以て組織する九年法會では去る八月六日本年度總會を開催したが、本年は母校へ入學以來第貳拾周年に該當するので物故恩師並に物故學友の追悼會を併せ行ふこととし、午後三時出席者一同(十五名)大和田町安養寺に集合、故岡村博士外三恩師故春木朝次君外十六學友の靈を祀り、安養寺住職導師となり、いと莊嚴裡に追悼會を執行して其冥福を祈り、同五時より神崎川畔豊島樓に於て懇親會を開催

隠し藝の發表までありて一夕の歡をつくし午後十一時解散した、因に本日選舉された次回幹事左の如し。

幹事(常任) 近藤 友房君
大岐 榮君、清水 榮松君

九 政 會

本年度政治學科卒業生を以て結成せる同期生會創立總會は、七月十日明治製菓三階ホールに於て開催す、學校側より特に、岩崎、吉田、大山諸先生の御臨席を得、先づ荻阪幹事同期生會設立の主旨並に今後の希望を述べ、續いて平田幹事より會則の發表、總會、會名其他に關し審議す、續いて諸先生より母校の近況並に當會の將來への激勵の辭を頂く、宴に移り胸襟を開き會員相互の實社會に對する感想談等に時刻の過るを知らず、一同記念撮影をなし和氣瀟々裡に九時半散會す

(出席者)

來賓 岩崎卯一、吉田一枝、大山彦一の諸先生
會員 池田彌一右衛門、荻阪 操、大西與輔、太田政男、久保敬夫、原田三郎、原田 剛、平田榮福、福田敏夫、松田徳二郎、八坂利武、山中恒夫

動 靜

小野 壁一君(明四〇専法) 秩父、熊谷區裁判所判事より吉原區裁判所兼靜岡地方裁判所判事に轉任、住所靜岡縣富士郡富士町平垣前田二三七〇六

藤原 隆一君(大四 専法) 大阪工業新聞社、住所旭區森小路六ノ二七

天羽 強君(大四 専法) 奈良縣五條驛長井上 善一君(大四 専法) 製箱業

西家 宇平君(大二 専法) 大阪市立難波實業學校
高谷 健造君(大二 専商) 大阪市立扇町商業學校
山家 作造君(大二 専法) 芝罘香寶飾店(南區心齋橋筋一六) 住所尼崎市今福太田二

名越 日月君(昭四 専法) 警部補、枚方署より戎署へ
北田 康民君(大二 四専商) 警部補、戎署より島之内署三輪 一郎君(大二 四専商) 昭和銀行澁谷支店惠比壽出張所(東京市澁谷區下通二丁目一五ノ二)

天宅 俊治君(大二 大政) 警部、天滿署より警察部特別高等警察課へ、住所豊能郡池田町東市場一五一飯國莊三郎君(大二 五専法) 出雲製織會社常務取締役(島根縣鏡川郡今市町)

中島 平吉君(昭二 大經) 任消防士、兼警部、保安課より警察部消防課兼消防練習所へ
山村 保造君(昭二 専法) 神戸、親和女子商業學校教諭

宇津原 砂君(昭三 大法) 警部補、高津署より鶴橋署
山田清太郎君(昭四 大法) 警部補、堺署より天滿署へ
御堂河内四市君(昭五大法) 大阪朝日新聞社通信部、住所旭區野江町三三ノ二

田邊 猛夫君(昭五 專經) 第一徵兵保險會社、住所小倉市船頭町一四
白川 清君(昭五 專經) 大阪本田簡易健康保險相談所

安藤 知久君(昭五 專商) 日本生命保險會社廣島支店

より島根縣濱田出張所長に轉任(濱田町淺井)

荻原 惣平君(昭六 專法) 大阪逓信局保險課運用係、

住所神戸市須磨區關守町二丁目五〇

堅正 一雄君(昭六 專法) 製箱商

(政次)

沖 靜垣君(昭六 專團) 電気文化振興會を設立し、

事務所を西區土佐堀通肥後橋ビルに置く

二口 貞信君(昭七 大法) 任警部補、保安課勤務

安藤 羊藏君(昭七 專商) 福岡市今泉若宮町にて前田

屋パン店經營

近藤 廣重君(昭八 大法) 愛媛縣温泉郡坂本村巡查駐

在所勤務

山本 實君(昭八 專一商) 計理士、播磨造船所勤務、

住所兵庫縣揖保郡神部村山津屋

顯谷 泰三君(昭八 專英) 大阪市港灣部

山地 文雄君(昭八 專二法) 大阪市旭健康相談所

木下 清君(昭八 專三商) 陸軍主計中尉、東京市牛込

區若松町(陸軍經理學校學生)

藤田 義雄君(昭九 大商) 滿鐵用度部通關係、住所大

連市伏見町七五

松田徳二郎君(昭九 專一商) 大阪稅務監督局

佐藤嘉一郎君(昭九 專一商) 宇部窯業工業會社(山口縣

宇部市)

内山 寧隆君(昭九 專一商) 大阪鐵道局

北條 茂義君(昭九 專三法) 長城鑛業會社、住所住吉區

阪南町西二丁目二〇、福田廣重方

太田 政男君(昭九 專二法) 阿部野署、住所住吉區阪南

町西二丁目三三

安東 虎雄君(昭九 專二法) 會根崎署、住所東淀川區長

柄西通二丁目三

松下 善夫君(昭九 專二法) 大阪港水上署、住所此花區

西九條下通二丁目四三、木本七之助方

野口 卯吉君(昭九 專二法) 滿洲國計理官、赤峰縣公署

より熱河省承德縣公署へ轉勤

藤井喜代次君(昭九 專三商) 大阪鐵道局、住所住吉區住

吉町一〇三八ノ一、兒島市太郎方

笹岡 繁敏君(昭九 專三商) 大阪稅關監視部、住所住吉

區松虫通二丁目二四、金田方

辻 精一君(昭一〇 專一商) 横山岩商店(南區瓦屋町

一番丁五〇)

森永 一郎君(昭一〇 專一商) 北村アルコール合資會社

鈴木 重親君(昭一〇 專一商) 日新工業社大阪營業所

小崎 正司君(昭一〇 專一商) 後藤回漕店輸出通關部

大庭 莊君(昭一〇 專一商) 日本タイプライター會社

大阪支社

井手 喬夫君(昭一〇 專一商) 日本高度鋼會社大阪營業

所(三和ビル内)

山下 晴男君(昭一〇 專二法) 日本生命田邊出張所より

同社大阪支店へ

野田 義人君(昭一二 專一法) 東横食品會社(目黒區上

目黒六)住所東京市荏原區下神明町五八二

李 雄 烈君(昭一二 專二法) 堺南土地區劃整理組合(堺

市南新町一丁心連寺)

浦阪 文一君(昭一二 專二商) 内海紡織會社營業所商務

課(東區高麗橋二、三井生命ビル四階)

崎谷 三郎君(昭一二 專一法) 滿洲國新京松浦商行牡丹

江出張所、住所牡丹江省寧安縣牡丹江昌德街一〇

番ノ二號ノ二、鈴木方

椎木 邦彦君(昭一二 專二法) 大阪逓信局保險課、住所

布施市中小坂東翠園、中澤方

田中 孝昌君(昭一二 專二法) 大阪市經理部調度課、住

所南河内郡黒山村黒山

是恒 達見君(昭一二 專英) 東北帝國大學法文學部法科

住所仙臺市土樋一六四、武藤方

移 動

(舊姓高井)

富山不二臣君(明三〇 法) 京城府光化門通一官舎一〇

平岡種三郎君(明三〇 法) 東京市澁谷區鶯谷町七

(舊名甚一郎)

樋口 禎亮君(明三〇 法) 住吉區北田邊町八二六

石躍 重之君(明三〇 法) 豊中市麻田山莊九六五ノ三

私市 力君(天四 專法) 北河内郡磐船村私市

岩岸 巖君(天五 專法) 三島郡吹田町一〇八〇

八田 薰君(天三 專三商) 福岡縣直方市御宿町尾柳三

五六

久田 一榮君 (大三四專法) 住吉區阪南町中四丁目四

(電天下茶屋四九二一)

三輪 一郎君 (大三四專法) 東京市小石川區武島町二

澤岡 留藏君 (大四五專法) 港區八幡屋浮島町一丁目二

二一

加藤敬之助君 (大四五專法) 松山市豊坂町一、蓮福寺内

福永 泰章君 (昭二專法) 兵庫縣武庫郡鳴尾村西開野

日下部茂一郎君 (昭二專法) 此花區上福島南一丁目二

二一、中島方

松本久米一君 (昭三專法) 西淀川區浦江上一ノ一二五

岸井 八束君 (昭七專法) 三島郡吹田町東町一二九四

溝畑 精三君 (昭五專法) 北區堂島上一丁目九

(高野山崎) 井上 龍男君 (昭六專法) 南區瓦屋町五番丁二三

森木 徳雄君 (昭六專法) 神戸市湊川町五丁目一〇八

村上 五郎君 (昭七大法) 住吉區丸山通一ノ五丸山園

藤谷 光慈君 (昭七專法) 東成區本今里町二三九

向井 啓治君 (昭七〇專法) 西宮市馬場町三五

松本九一郎君 (昭八專一商) 東京市芝區愛宕町一ノ二九

愛仁莊

柳 一隆君 (昭八專三法) 大分縣西國東郡西真玉村

高芝 清貞君 (昭八專二法) 港區八幡屋大通一丁目七

福留 淳君 (昭八專二法) 港區石田元町一丁目五七

光井 章雄君 (昭九大商) 大連市須磨町四

古川 壬子生君 (昭九專一法) 岸和田市野田町九七

吉仲 敏夫君 (昭九專一法) 奈良縣北葛城郡河合村川合

六五五

森 健君 (昭九專三法) 名古屋市中區鹽付通一丁目

一五

久保 敏夫君 (昭九專二法) 此花區西九條上通一ノ二六

鈴木千代松君 (昭九專三法) 港區桂町一丁目六、笠松量

平方

平田 榮福君 (昭九專三法) 此花區春日出町三三〇ノ一

廣政 俊視君 (昭九專二法) 住吉區濱口町西三丁目一九

出原郡一方

早田 孟生君 (昭九專二法) 豊能郡庄内村三屋一〇九

福田俊太郎君 (昭九專三商) 住吉區濱口町東二ノ二六

山田 義臣君 (昭九專三商) 東淀川區國次町三八五、赤

井方

加畑 忠雄君 (昭九專三商) 東淀川區十三東ノ町二丁目

一一、大西方

高橋 俊雄君 (昭九專二商) 北河内郡守日町土居四八一

立花 成美君 (昭九專二商) 神戸市灘區倉石通二丁目二

三木 寛則君 (昭九專英) 北區道本町五七

濵川 俊郎君 (昭一〇大法) 京都府乙訓郡向日町寺戸久

々相九ノ六

澤野 眞三君 (昭一〇專一商) 旭區中宮町五四一、寺澤

紋三郎方

佐藤 英夫君 (昭一〇專二法) 兵庫縣川邊郡川西町小花

宗近

稻森 茂君 (昭一〇專二法) 布施市永和一七六

森尾 善一君 (昭一二專一法) 小倉市木町六七二ノ七

金 鐘 圭君 (昭二專二法) 朝鮮全南羅州郡南平面橋

村里、農奉長方

岩井 義雄君 (昭二專二法) 兵庫縣川邊郡伊丹町伊丹

三三

逝 去

宮本 政藏君 (推) 昭和十二年八月九日

中西喜代造君 (昭八專英) 昭和十年四月

阪本榮之助君 (昭一〇專一商) 昭和十年十月十九日

小西彌三三君 (昭一〇專二商) 昭和十二年七月十三日

荒川 少意君 (昭一一大法) 九月三日午後二時半、所澤

陸軍飛行學校操縦幹部候補生(飛行第五聯隊附上等兵)として、埼玉縣入間郡三好村上空を偵察機

にて特種飛行中、突如機關に故障を生じ墜落殉職

した、四日名譽の校葬を執行せらる。因みに全君

は在學中既に技術卓抜にして二等飛行士試験に合

格、昭和九年度全國學生航空選手權大會には二種

目に優勝し、陸軍大臣勳を獲得す。卒業後本年一

月八日市飛行第三聯隊に入隊、全五月飛行第五聯

隊附となり、本邦最初の操縦幹部候補生となり全

校に入校す

改 姓 名

(舊)

山崎 龍男

木村 一良

(新)

井上 龍男

樋上 一良

- 二百米平泳 ④矢野
- 二百米リレー ②關大チーム
- 八百米 ①上野10分56秒 ③山岸
- ⑤柴田

- 百米 ①服部1分3秒2
- ②中西1分15秒 ③山田

- 八百米總泳 ③關大チーム
- 各校總得點(第一部) ②關西大學71點

漕艇部

全日本選手權關西豫選

九月四日、於瀨田川コース(二千米)

- エイト第一次豫選入選
- D組 ②關西大學 6分27秒%

柔道部

全國高專競技京都大豫選

七月十五日

同志社高商(不戰五人) 關大豫科

七月十七日

天理外語 (大將同志) 關大豫科

劍道部

全國高專競技京都大豫選

七月十九日、於京大道場

- 京都高専(大將同志) 關大専門部
- 關大豫科(不戰一人) 廣島高師
- 九州醫專(不戰一人) 關大専門部
- 山口高商(不戰二人) 關大豫科



學友會發會式(專、二)

經濟學科學生は、學内の理想化は科内學生の親和と、眞理の討究にあり、種々協議中の處、各學年クラス會は滿場一致を以て可決し、茲に學内の注視をあびて經濟學科の金字塔とも云ふ可き經友會は設立された。この發會式は七月十日午後八時より三階講堂に於て行はれた。

當日は學期末の御繁務をも顧られず指導教授たる中川、矢口、赤羽、川上(敬)の諸先生の御來臨を仰ぎ、經濟學科學徒二百餘名出席のもとに副委員長二年稻田悦治君の開會の辭に式典が開かれ、委員長三年平澤農一君の設立經過並びに本會の今後に關し、烈々たる挨拶あり、續いて諸先生の御慈愛あふるゝ激勵の言葉は本日の盛典を意義付けるものであつた。發會早々乍ら研究部は夏休研究課題を發表し、九月中に討論會を行ふことを申合はせ、副委員長一年西村義治君の開會の辭に滿堂を生氣に包み學生歌を高唱し更に關西大學の萬歳を三唱して午後九時半散會した。

(經友會總務部報)

尙役員は各學年クラス會役員を以て組

織し左の諸君が就任した。

- 指導教授、岩崎、磯部、赤羽、中川、川上、矢口、正井、堀(經)、河村(經)、古川、中村(良)、森川の諸先生
- 委員長、平澤農一、副委員長日俣正三、稻田悦治、西村義治、總務部主任、唐川次夫、雜誌部主任、田岡隆、見學部主任東木福太郎君、研究部主任委員長兼任

東亞研究會

機關紙「東光」出版記念總會開催

七月八日吾々の待望久しかりし機關紙は「東光」なる名稱の下に出版せられた想ひ起せばこのことを計畫して早や一年微力の限りをつくして出来上つた本を見て深い感懷を催したのである。

就ては學部と合同の總會をリプトンにて武田先生と大朝の神尾先生を御招きして盛大に行ふ。この日この心からの嬉びに浸り、目の前に近き夏休を樂しみ迎へることが出来るのであつた。

尙東光は一部二〇錢にてお頒ちしますから會員にお申下さい。(専門部高橋記)

基督教青年會(千里山)

日本基督教青年會同盟委員會は、時局に對して左記決議をなし、加盟青年會たる本學青年會に逋達し來り、以て時局認識を深め、我等の處すべき態度について

注意するところがありたるを以て、我等は特に此秋に於て、我等基督教者の責任輕からざるを思ひ一層の努力を爲し、諸兄の熱烈なる祈を要望する者であります

「本同盟は時局の重大性に鑑み、加盟青年會々員が各自一層相戒めてその本分を盡し鋭意自強奮つて國難に殉じ以て

皇恩の萬一に報じ奉るに遺憾なからしむ事を期す。併せて東洋平和確立の一日も速かならんことを祈る」

猶ほ本同盟は過去に於て實施したる軍隊慰問事業の經驗に基き機宜の處置をとること、右實行方法に關しては常務委員會に一任す。

辯論部(専門部二部)

- 左記旅程を以て夏期遊説をなし、大いなる收穫を擧ぐ。
 - 八月七日、大阪發富山へ
 - 八日、富山着、同市徳風會館にて第一回開催
 - 九日、富山發松本着、同市公會堂にて第二回開催
 - 十日、上高地へ
 - 十一日、松本發、名古屋にて熱田神宮に戰勝祈願をなし、大阪へ歸着
- (参加者) 森川教授、門上部長、大谷副部長、副田遊説主任、山口、稻野、駿河、粟田、春名の諸君



朝 冷 還

第十二回七月例会

七月十日(土)午後六時半より、天六
學舎三階會議室に於て開催す、採録句左
の通り。

(南紀行)

安井 龍章

潮ゆるくデッキに和む歸省の生徒

貝殻の一つも見えず濱木綿咲けり

岩菜生ふる崖かひくゞり鴉鳴く

夏草の窓にとゞけり夕晴るる

夏山のふところ深き御堂かな

月見草亂れ鐵路は青く訝ゆ

梧桐咲く遊病院門札新たにす

川波の白し漁舟に梅雨晴るる

黒杭 豆刀

異國船巨しヨットが赤すぎる

夕波の光りがきつし飛ぶヨット

片かげりビル土曜日の人吐けり

メロデーは輕し茶房の護模樹伸びる

(病兒看護)

遠蛙死冤と闘ふ子を護る

油照り兵隊つゞくハイウエイ

夾竹桃朝の疾風のおとろへぬ

雨すゞし朝より吾子はよく眠る

炎帝の都ぞビルに陰もなく

炎帝の撫育の柳水にうつれり

第十三回八月例会

八月二十日(金)午後六時半より、天
六學舎三階會議室にて舉行す。

仔犬肥え枇杷の葉の色黝めり

夕涼し勤行の聲もれくるも

解定を告ぐ析の音山内に

朝涼し山内作務の人許多

蟬の聲警策の音に今日も暮れぬ

康黍の廂にとゞき獨りある

掃苔に寂こまやかに父の墓

中塚 素木

走馬燈吾子は何か歌ひけり

眞盛れる夾竹桃をうてり雷

カンナ燃え水銀柱は狂昇す

汗の兵子を抱く妻と黙しある

戦争に出て行く馬よ蚊の夕べ

出征に稻の穂孕む近からん

夜業工召集令を汗の手に

芙蓉咲きみだれわが友みな嫁きぬ

きびの花揺れふるさとの月落ちぬ

蟬あはれ檜原の霧に鳴き沈む

旅人よ霧にからかささしてゆく

投 稿 句

(大臺ヶ原山) 山野井昂星

滴りにしとゞき棧道踏みしむる

前後方小鳥の啼いて山涼し

林道を雨に濡れ行き納を拂ふ

吊橋の揺れて右手なる瀧白し

萬歳のどよめき聞きつつ夏旅に

(仙臺七夕祭をみて) 飯森 徳秀

笹竹に五色ちりばめし街行けり

押されゆく街は五色に吹流し

臺北 橋 欄葉子

椰子の花こぼるゝ風に蝶すめる

早雲高く軍籍吾も負ひ

九月例会豫告

學報俳壇九月例会を左の通り開催致し

ます。學友同好諸君の御出席を希望しま

す。

一、日時 九月二十八日(火)午後六時半

一、場所 天六學舎三階會議室

「當季雜詠七句」

有田朝冷先生出席

大正十一年七月十五日創刊

昭和十二年九月十日印刷

昭和十二年九月十五日發行

不許複製

編輯 神屋敷 民藏

發行所 關西大學學報局

天六學舎 大阪市東淀川區長柄中道

千里山學舎 大阪市外千里山

大審院判事
法學博士

和田于一著

菊判總布特製
紙數八七四頁

定價七圓
送料廿貳錢

最新刊

判例契約解除法

卷上

總べての財産的鬭争は私法上に在りては、結局、損害賠償問題に歸着するのであるが、其の一步手前には契約解除の問題が横たはつてゐる。契約解除問題は全私法の中心問題たるを失はない。契約解除を中心として、私法の一大體系が構成せられ得るものと謂ふも、必ずしも過言ではあるまい。従つて、契約解除法の研究は學問的に見て極めて重要性に富む。又、財産的鬭争に終始する實業界に在りては、一日として契約に關する争議の惹起せざることなく、裁判所に於ても、亦之に關する訴訟の審理せられざる日ごてはない。従つて、之を實務の上より見るも、契約解除法の研究は、亦、極めて重要性に富む。

本書は著者が實務の經驗に基づき十年の歳月を費して成りたるものであつて、判例に依りて活き、判例に依りて躍動する契約解除法を中心として、私法の一大體系を組織せんと試みるものである。本書に於て、著者の主張を立證すべき驚くべき多數の判例が蒐集分類せられ、判例を通じて學説を窺ひ、學説を透して判例を検し、以て、契約解除法の領域に於けるあらゆる問題は、周到綿密なる解決が與へられて亦遺漏なしと謂ひ得るであらう。學界、法曹界及び實業界の諸賢の座右に推薦して、其の日常の使用に供せられんことを望んで已まない所以である。

下卷續刊

株式會社

大 同 書 院

東京 振電
東 替話
京 東 神
駿 東 田
河 京 二
臺 一 二
中 八 二
央 二 二
大 三 二
學 八 八
前 番 番

大阪 電話
北 區 北
區 三 一
梅 一 一
田 九 六
新 七 五
道 二 三
番 番 番